



馬医醍醐 中之第一

麻布大学所蔵

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

玉要集 六卷
 金益 上下
 玉傳集 上下
 離舌 上下
 三个秘傳
 外法卷
 馬刻卷
 金瘡兩方
 以上十六卷

馬医醍醐 中之第一



一 目の色は平負目白ぬ時を云ふ事 白濁く入り赤くするは
 うい白物なることあるやう白濁く入り又云目の後眼脈乃
 りく入り平負目馬目軟く入り赤く入り又目白濁く入り好色
 目負入り時目鹿入り赤く入り又目白濁く入り好色目
 入り七月二十七日也

玉要集卷 第三

一 目の色は平負目白ぬ時を云ふ事 白濁く入り赤くするは
 うい白物なることあるやう白濁く入り又云目の後眼脈乃
 りく入り平負目馬目軟く入り赤く入り又目白濁く入り好色
 目負入り時目鹿入り赤く入り又目白濁く入り好色目
 入り七月二十七日也

一 目の色は平負目白ぬ時を云ふ事 白濁く入り赤くするは
 うい白物なることあるやう白濁く入り又云目の後眼脈乃
 りく入り平負目馬目軟く入り赤く入り又目白濁く入り好色
 目負入り時目鹿入り赤く入り又目白濁く入り好色目
 入り七月二十七日也

角見之安物多うくすす角くさる麻にて五日始にあらはし
百日は淨法一時の清

一 胸も自心の血袋にあたり物事をも散らすこと大熱に因り
生腹をくくし乾くこと死又くみらるるも受その目的
凡そ死あつらふあふんあふんらも血のくちよあつらつらと
あふん——さい夏の古用とを中法をうけのこるも
二季は瘰癧の事馬の糞でうたふ云り井背角灸と
井の温くあも背角灸灸すこと後臥がうけしこと
冷川入適り灸を灸ふ面を灸根のふくぬる毛血
蒲灸灸石見川大津川背灸す赤くくし御持

人の齒は付くもく一角は瘰癧入つて七角もみ角も馬乳が
くそあつらつ角がくひあつらつことくして角を灸く
あつらつらつ角も灸く角

玉要集卷第四

一 角の皮を灸くも角の皮を灸くも角の皮を灸くも角の皮を灸くも
て角もく角もく角もく角もく角もく角もく角もく角もく
ひもく角もく角もく角もく角もく角もく角もく角もく
くもく角もく角もく角もく角もく角もく角もく角もく
角もく角もく角もく角もく角もく角もく角もく角もく
脈性く事微し沈滑は生肩角根しを灸くし

つらふのりとは是も負ふるに病を患へし自負十日を
 つも難果し不食熱し腹ふれぬ息し刺刺絶えぬ
 療治は歌ふと物言まへし一葉は牽牛子及び人黄
 子の中射干下川骨又石見川椒の類平通散十二散
 乞ッ人の齒がけしゆして一荷は痰入るやが荷は二反と
 目下胸をの内をえんと黄と何ふ言まはしとやんと何
 但歌う方はしと治ると平しと直歌痛ても歌歌りど
 ぞ之中葉は川草うら加へり何又痰をれし枳椇加へるが
 治めし胸の言うとあふは果加へりあふは
 義本加汗歌はれし地黄は金瘡不限以物の聖薬といふ
 一
 一と牙周はり或印くし或は依乾の言も自負痛覺く
 こそあはれぬの如くは舌を事しはし歯をとりし治
 とも齒とくひてたさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 療治はり枳椇ゆひしと上も自負るあうさうさうさう
 一は楊の葉はさうさうさうさうすあはし水はさうさう
 目下石はしともう搦て直上は歯はしとけ塩ありとけ
 けいともせ懸とじまへしとさうさうさうさうさうさう
 といふるとあげ療治はしともさうさうさうさうさう
 一事は枳椇子の類枳椇の類慈心陳皮の類及人参
 下合をさうけし車前子黄は湯ふても定熱はり

ての効る方をもまゝしてまゝ加馬やととり息脈浮を
食と神と牛膝と加膝はよく肉骨自鼻より物と薇苓を
加川芎と加胃はより房をあらひく白朮と加又干姜
も加煎して糖と沸とあつての薬をたつてあつての薬を
一 ほうえのりえは使龍飲はるふ牛負扁身をえて能く推為
のよく脈のをぬき事此細生は滑い死をわらうく
目の用よりとりて用あらはははらうとらうく物入汗とく死
まじし的事より井と灸より定まづ塩湯を初として
茶く事 益知枳椇 芍薬 甘草 茯苓 枳實根下
右合茶と齒けりて行て一箇一錢五分を符節とて七日を

何種をとりとらふ牛膝と加まといつくと灸より何種を
まの正人灸と加活葉根とありて立てるを何汁とて
一錢入り者より一錢

玉要集卷第五

牛膝之変

一 牛膝と云は血為切之百し定むも血は川血虚に尾くとて血
力の毛ぬるを血と事 息脈細に何ありて浮人観
初の脈どうかあるは瘰癧と事 尾葉と馬の尿とてよ
りくは石灰と枳椇魚一内葉と事 丁子陳皮各二下
枳椇 厚朴 肉桂 桑白皮各二下 早通散二十錢 右合茶

為内なる毒の如く一の向ふを内とありてむら

一 本草 事 一 之病はるる法は肉くさるは火出さとの

しとくすの二年三年もあらず昔画し事と乾熱し

脈折しこれに喉を流りて馬脈折虚あり

法とし療治しりある本草にことしと実

塩入るんよあひあつてはりて痛く英思を

方時又は黄葉して洗石灰玉南星貝天蓋地骨

牛皮乾あつ合す付肉菜し事 石と川石と十六錢

氣薑二片 川骨 石根の乾 各五錢 赤白豆 各五錢

疎血二片 右合葉し寸毎らす寸

一 牛癩 事 之は夫に瘰癧疔ありて口鼻に流るる

ことと後膿液のらるる汁も二字も三年も九

馬二世不活り削之を画し事 入脈結少人息を沈細

多し画馬形も瘰癧とて毛立りて画る形熱と也ゆ

とある瘰癧し事 亦よりて針して疔方寸十文字切

りりりて之を洗柏付葉し草草以糸之内葉しり

沈香 雀舌 乳香 各五 石見川石 十五 人冬 下五

葉下 細抄をさしててり常す切

一 凡そに負かしの肉をくすりて後、肌ぬるるの事

画し事 鷄子黃陰脂共是れを好しと家ありと鷄

かろくろりたる色鶏子良張まるとろふ志てその是れ毛た
ち慮るる石脂療治くろの爲に應竜草乃血証に之を
兼ふくろは極て可洗之及鶏子鶏卵は宜早治す
くろ膏菜付膏けけりし取治ふことろをくろ色し
肉菜くろり川骨川骨蓮肉赤膠乳あふ合菜
石膏蒲黄之汁けめ膏下釣

玉要集卷第六

疝合病五般し事

一 依寇或裏軟少松原も負上突之眼も通くし目のく
に然りるをあるり上突——後ろすは治目の目

ろり之果のくろは治り生し舌脈衝小あり肉菜事
大貫川骨 黄芥子 黄連 紫穂葉 白朮 半夏
散薬も 合菜 車前子 黄之汁けめ膏 可何指菜
し事 淫婁根 黄柏 竜腦 夜砂 石膏 葱水
石膏下明盤少加り子のくろ指魚

一 血爲くろ上腕處上肉射吹くろを画し事 骨動ノ
脈上中下目前如治り子之骨動上下をろくろ治り
至之瘡治くろ八九肺俞肺門心俞之れく黄くろ治り
竹葉事 鹿皮霜 川骨 夜冬 陈皮 西海子霜
桂心 各果も合菜は治らめ膏下釣

一 肝腹乃急も負瘵と云ふ不入瘵本體の内と云ふは
 之を急事馬に瘵と云ふは脈神就息在而脈在
 冷神の治と云ふは瘵治事七病と云ふは瘵之治瘵
 と瘵あつた瘵今も瘵七病の瘵と云ふは瘵は瘵
 と云ふは瘵内事川骨公安瘵事石久川瘵瘵
 平通散瘵右合瘵瘵と云ふ瘵

一 自負馬肉血と云ふは瘵の瘵事瘵と云ふ
 血の色瘵事瘵と云ふは瘵の瘵事瘵と云ふ
 息脈細沈るる生動の脈と云ふは瘵の瘵事瘵
 平通散瘵右合瘵瘵と云ふ瘵

右御持得ありと云ふ事丁丁釣

一 自負馬瘵と云ふは瘵の瘵事瘵と云ふ
 瘵の瘵神を瘵の瘵事瘵と云ふは瘵の瘵事瘵
 と云ふ瘵と云ふは瘵の瘵事瘵と云ふは瘵の瘵
 川骨事右御持得ありと云ふ瘵の瘵事瘵
 物事丁丁釣

玉要集六巻迄

金益集上

一 金益集と云ふ請病と云ふ瘵事瘵と云ふ瘵

号たることを病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の
一 一の病はるるの例と云ふ

一 病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ
此風をけ五神と云ふは五神と云ふは五神と云ふは
一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ
一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ

色お性書

一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ
一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ
一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ

一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ
一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ
一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ

一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ
一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ
一 一の病はるるの例と云ふ五芳七傷八邪の例と云ふ

一 二月、麻毛糟毛の病、下毛、箱毛、海原毛、中毛、葉毛、
毛、雀毛、下毛、名付、二毛、平毛、これ葉の加減
目録

一 秋、月、箱毛、海原毛、下毛、中毛、葉毛、
糟毛、下毛、名付、雀毛、平毛、葉の加減
目録

一 冬、三月、毛、下毛、雀毛、中毛、箱毛、海原
毛、下毛、名付、葉毛、雀毛、平毛、葉の加減
亦、下毛、下毛、雀毛、中毛、葉の加減
亦、下毛、下毛、雀毛、中毛、葉の加減
亦、下毛、下毛、雀毛、中毛、葉の加減

一 下毛、下毛、雀毛、中毛、葉の加減

病、甲、乙、丙、丁

一 本、火、金、の、病、下毛、雀毛、中毛、葉の加減

一 土、水、の、病、下毛、雀毛、中毛、葉の加減

一 鳥、毛、の、病、下毛、雀毛、中毛、葉の加減

一 下毛、雀毛、中毛、葉の加減

一 雀毛、中毛、葉の加減

一 中毛、葉の加減

一 葉の加減

馬、の、病、目録

才一上流の事あるはさういふ事なくあたるせうといふ月後
上胸より中胸へ通るはさういふ事なくいふ事なく

才二下流の事あるはさういふ事なくあたるせうといふ月後
上胸より中胸へ通るはさういふ事なくいふ事なく

才三中流の事あるはさういふ事なくあたるせうといふ月後

これ邪病の事

才一五方八邪の事一此月小てれある風ありにひくはれ火
くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
早くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

才二肘底向底利実踏按系流折系断指引絶

まけけ執りては則邪病と云はれいふは勝りあさるる病

才三余血れと病と云はれくさくさくさくさくさくさくさくさく

あやふりもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

而依の悪血はさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

と心勝りともさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

血の邪瘡ともさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

あやふりもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

才一此系云五勝ともさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

根がさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

川号下白果さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

一 此類は海老の腹より出る。或は二日以内に出る。其の形は生いなりと平ゆきなりと或はうらぬと。一から二センチメートルの長さあり。白むく葉と干す。この葉の木の枝と干して葉を蒸す。蒸す葉は葉湯とてしてを煮て用む。

一 石麻を煮ずりぬる。こも茶と。灌頂の煎茶葉と干す。すきも何汁に加減する。そのく。の腹の白むく葉と干す。一から二センチメートルの長さあり。白むく葉と干す。この葉の木の枝と干して葉を蒸す。蒸す葉は葉湯とてしてを煮て用む。

一 石麻を煮ずりぬる。こも茶と。灌頂の煎茶葉と干す。すきも何汁に加減する。そのく。の腹の白むく葉と干す。一から二センチメートルの長さあり。白むく葉と干す。この葉の木の枝と干して葉を蒸す。蒸す葉は葉湯とてしてを煮て用む。

一 胃はりして腹をこむ。こも茶と。灌頂の煎茶葉と干す。すきも何汁に加減する。そのく。の腹の白むく葉と干す。一から二センチメートルの長さあり。白むく葉と干す。この葉の木の枝と干して葉を蒸す。蒸す葉は葉湯とてしてを煮て用む。

とひけるは下尾の移りも志すりふあといける
少く間あり眼もきくきり鼻もあるといふ事
何れはあはれといふ事とせ灌頂は薬(指葉根)と
加減し何れ則ち治するなり

一 虫版灌頂は薬といふ事金といふ事
これ何れは口傳授の虫といふ事身熱し版
といふ事志記といふ事しる指の時間あり
といふ事細起外部鼻をさうといふ事
下向すといふ事版つれりといふ事
此も版といふ事し中尾といふ事
といふ事

若葉桃の本枝深のうさ台黄し

うさ

一 瘡の内葉の事 血瘡の内葉は灌頂の葉も
瘡一而は之腫れ或は癰腫八腫れといふ事
けしめ

一 肉解は第只吹かす肉解は海首の内肉解は
あつといふ事いれといふ事六月七月
といふ事六月七月といふ事
といふ事六月七月といふ事
といふ事六月七月といふ事
といふ事六月七月といふ事

あはれに金くし林と一切酒也

金益集上下巻

玉傳集上

中國云安樂集の白加藤茶二百八有け内六六は抜出切
あはれに金くし林と一切酒也

中茶の部

- 一 内府茶極く珍と云茶 皂莢之云中茶 如長皆茶下茶
- 一 信る 牽牛子中茶也 人豆も中茶
- 一 香す白 村之中茶也
- 一 せららふ 干姜とこら中茶也

一 瘧 前巻 中茶也

一 依れ服病 芒中茶也

一 心負る 川骨中茶也

一 息の病 石菖蒲 了らふ 志焼 沉香 中茶也

一 甲是の病 松のこら 芍薬中茶也

一 打身 石見川 干姜中茶也

一 笥の病 干姜 毒脱味中茶也

一 乳の病 木名 沉香中茶也

一 間の時 昆布中茶也

一 ちまるとにち茶中茶也

一 寒の芍薬 耳草也

一 熱の芍薬 人參也

一 風病の芍薬 干姜也

右の續とるる時を心づけらるる之を芍薬と云ふなりて
芍薬

下法し部

一 芍薬 瘡腫を治すに用ひし丹藥名

一 青風 瘡を治すに用ひし水薬名

灌頂上加減く麦

一 猪馬版もこれをもくくくくくくくくくくくくくくくくくく

大英ッ加減

一 治る版と云ひくも是尾と云ひくも牛子と云ひくも
徳のいともうく加減くく

一 治るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かまひてゆりくくくくくくくくくくくくくくくくくく

枯葉根ッ加減くく

一 治す白版と云ひくも根白皮と云ひくも芍薬向材と云ひくも
新くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 治る版と云ひくも新くくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 治る版と云ひくも新くくくくくくくくくくくくくくくくくく

同調は去とる此をいふ高汁下釣去用の内不限方の極
類もいふことしていふ極は

一 内府吹射息をうけし首の内はくちくち鼻をさして内

一 内府吹出られお出よとわいの下物はぬんぬん氣盡く

とまをいりて花をうつにうけて内はくちくち

一 内府はくち吹鼻血はにやうくちくちを案檀粉をう

色くちくちの思極は加

一 内府肝も腸より下出毒服味加少はくちくち

一 癢けつさくは癢虫癢は胡椒と内汁ゆ

一 癢大きくつおえは胡椒加をくちくちをいりて

一 腸より下出癢は白き物と●をけりし胡椒加少加也

一 痛身よとさかすくさく根の思極は去りて沈も薫陸を賣

川等をしつ加てゆりて内はくちくち肉はくちくち

くち根の思極は入る

一 尿結し事服はゆりてくちくち根はくちくち

くちくち百舎つ下矢くち液菜つゆりてくちくち

内汁はくちくち

一 尿法尿散あつくちくちくちくちくちくち

合はくち

一 尿法尿散あつくちくちくちくちくちくち

よまての虫拾出るとす白く一む干燥山椒ラカ
虫す白ク虫事

一 虫腹の尾よりして中腹よりさきなりぬる

一寸白の腹もよりなること身は皮なるぬる

結ぶの尿法に虫す白く一む

信宿しぬる死するなり

一 ぬる死もよりなるは是れ立根とならぬ一は信宿も

信宿しぬる

一 目の文字を勢たさく一は虫のありはくは

ありぬるは死するなり一は虫のありはくは

虫す白く虫事

一 信宿もよりなるは死するなり一は信宿も

信宿しぬるは死するなり一は信宿も

信宿しぬる

一 虫の腹よりして中腹よりさきなりぬる

結ぶの尿法に虫す白く一む

一 ぬる死もよりなるは死するなり一は信宿も

信宿しぬるは死するなり一は信宿も

虫す白く虫事

一 梅干ニツの肉 水銀中からす下 明礬下 金

と白傳出の松油ツカマ入

息相系し事

一 五言商の根寸の母ガ一の九とて七リとて三リと

童子れ飲乳よひして移りてあふすりて

一ツラツ子痛る 一ツラツまきとる 一ツラツ物移る

一 梅干肉 一少子焼 一塩硝

一 沈香 一丁香 一射香

一 木香 一安息名 一長夜

一 人參 一訶梨勒 一白朮

一 香附子 一犀角 一草薢

一 苦棟根 一竜腦 一牛腦

一 蘓香油 一薰勸

右今案梅干れ肉とてゆくとせし事六せし事

ふひとて乳とてゆらめ合せするにすく加毎

て受とてひのこつ汁とてうりて角を三月せある

又とて山とて一息とてけらるに別て角あるに別てす

くわい系し事

一ツラツとてとては傳る 一少子焼 一細絲ノ長の上

一 香とて如くむひのみとて又とて香とてとてうりて角

をも息とて又とて香とてとては別て角あるに別てす

ふ云内野の廣とすは流病に傳は

玉傳集下

一 悪教化の多極寧ろ此牙

才一系はもひいさらひとを鶴養がうをて後とすも
かをうーてむまうひくは傳をたうりまむむひい
くある程にはじまて射馬は由りまむてんてん
ゆり射又たむさむさうむむひいて聞くよの射あ
ふ

才二載玉をぬひくは徳のゆりふは傳まにゆり
うのう急もゆいふくまうこのいむじは傳

才三ころ馬あうりるる中業之系は傳まにゆりふはあ
うもふ下は

才四入馬にわき入方の耳ふは傳あり

才五ころ馬板をぬはしに射にふくは傳まにゆりふはあ
も徳とて一五系をーと及びりゆらうー業は友
草中業之

混教未からし事

一 混教未からし事なるは徳とすは流病に傳は
あふん大いとし生なるものも地大いとし生なるも
あふん大いとし生なるものも地大いとし生なるものも

五輪餅の事

五輪餅の事

折安撰集五臟論云 膈は膈也膈は腸之之集の上焦ハ
水の中焦ハ如膏膏下焦ハ如水之如るゆへに之焦之各
付五臟之各道も六腑付但け膈とて大なり之れ之
五季は用ざる一五人の用もさ一又一ありても乞
よめるの余二日一箇之と大海飲水とて死すと云
る本行せん之れ以て世平治也如死とるのとき此水
火凡空名を時そこのときもく如とる方也五臟集同
ちの仲間れ切串の内も之を葉とて余と知りたると

とるものいふとるや以て中より枝とるの法淨く是と
るにさうあらうとの事れれれれとる枝足とる之と
ゆゑに事あらう心也青方矢の真如法と白麻と之
れ多とゆゑもさして空開の鼻は昆せとて歌言也
深大所の神冥也背とる事 疑も頼ありとる

針葉の事

一 針葉とては膈肉骨骨産下物也之を收法するは汁
葉に付てさそし創病治とるなりとて此法とて葉と云
香白芷及芍薬少白朮少ひも何少何者下川草
竜腦下訶梨勒下檀栢下楊梅皮及下黄芩

右側胸をさしてさし移して針をけり也要す口をさし
しきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解
法ノ下胸の故に百舎を門より入上右口傳あり

友切之事

一 友切しき法の筋れ故に友下友針を切し骨をさし
しきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解
ひけ菱指つる是友下友針を切し骨をさし骨角録ノ
しきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解
流し曲馬ツキ糸をさして伝へ

何の曲しきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解
ふとせふこをとおろしきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解
右細
未捻の糸をのけりしきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解
肝ありとせしきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解

血受糸

一 驟驛血恒ゆひ糸糸繩のいふもしきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解
椒粉加へりしきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解
血をさしきるるにあつて粉ふふか加へ口傳は骨月虚胸肉解

玉傳集上下流

火氣を極さるゝ付あはれ病をいふは馬車と一持て
人と合さるゝ由之當極のりこ徳とけり月くはめて
つるの腹をとりけは馬車とけりて突て馬の勢とて
あはれ例のこゝにさして人と合むとさるふ右のりとの
徳とけりは馬車とけりて突てあはれ馬車とけり
とてはさるゝは馬のりとのりてけりてはさるゝ
と後馬若痛しとて馬車とけりて汗出た時とけり
ふたのりとのりけは馬車とけりては馬車とけり
右のりとのりけりては馬車とけりては馬車とけり
かゝるゝりては馬のりとのりては馬車とけり

見まらるゝる想きさるゝ時をて馬車とけりては
きりては馬のりとのりては馬車とけりては
ふまらるゝるりては馬のりとのりては馬車とけり
とては馬のりとのりては馬車とけりては馬車とけり

離舌集上下終

之ヶく秘傳

一 三ヶく秘傳とては六ヶ病と三ヶ病とて是れ
るゝ一ニツとては一切の病を乃病とて是れ
將物祇肖若類者一病とて是れ病と一病とて是れ

五勝六病一病とて是れ

莫不取之也。言其所以。二。何者。得之。馬。其。法。是。人。亦。法。是。統。

馬形旋毛論

旋毛論曰毛物之類衆矣其引重致遠堪託死生者得馬為可稱故其行地無疆雅人所以取象於御也然其種數亦多矣其間質之駑駿性之善惡與之毛色純雜固亦不同不可以一槩而論如其旋毛之生或在其左或在其右或在其前或在其後而命之似各因其名而遂有古函之說大抵相馬之法高

以秋骨為先旋毛挑其一端耳且馬之有旋未必果為函也而畜之者或或不利則歸咎於馬以謂馬豈無理也哉昔人固嘗有議其居處者而曰人函非宅函茲誠通達之論也苟能明乎此則不疑於馬矣今故圖其秋像及旋毛於左後之博物治聞者宜有辨焉



一 青不ハ肝ノ膽多リ肝ノ毛ハ赤ノ毛ノ立外ハ黒クシテ其ノ味ハ苦シク知テ瘡也

肝ノ膽多リ肝ノ毛ハ赤ノ毛ノ立外ハ黒クシテ其ノ味ハ苦シク知テ瘡也
 肝ノ味ハ苦シク知テ瘡也
 肝ノ味ハ苦シク知テ瘡也

一 心ノ膽ハ赤トシテ肝ノ毛ハ赤トシテ其ノ味ハ苦シク知テ瘡也此不ハ赤トシテ其ノ味ハ苦シク知テ瘡也

一 脾ノ膽ハ黄色トシテ肝ノ毛ノ立外ハ黒クシテ其ノ味ハ苦シク知テ瘡也此不ハ赤トシテ其ノ味ハ苦シク知テ瘡也

一 肺ノ膽ハ白トシテ肝ノ毛ノ立外ハ黒クシテ其ノ味ハ苦シク知テ瘡也此不ハ赤トシテ其ノ味ハ苦シク知テ瘡也

出る肺の勝りありと云ふ一 第六辛也と云味と
辛也三つとも云ふと云ふの故也若くは酸味也

一 胃脘の正北の毛の立外小低うを熱して知瘡しけり
あつた胃の脘よりあつたと云ふ一 第七酸也と云味と
辛也酸也と云の若くは物耳物の酸味也

魚瘡両方

一 馬よりとりし馬ふるると云ふは云ふと云はる胃の胃して
はるは云ふ

八ヶ取ふし度

頸背腹前股を右同示りし肩股後股を右同示

瘡し金葉し事

大頸の骨 西海子の骨 云雨星 牛乳皮の骨 右
あつた合しめ事可付

瘡を熱し事

一 瘡を熱し瘡れとの毛をてこし
一 瘡しるゝの瘡のとの毛をよほし毛をりし也

天文廿

五月廿日

老鴻新在場尉

仲總

坂内場在尉之

